

4 . ジャックフルーツの伝説 (ミンダナオ)
ルスリムランディアの地では、スルタンがその王国の最高権力者で、その臣民に全幅の忠誠と献身を命じていましたが、それは法律によって命じられていたのです。そのような忠誠心と統一は、戦争や闘争や他からの侵害の時に、必要なことでした。そして誰であれ、スルタンと彼の王国に対する逆行行為を表わす者は、即刻処刑されました。そしてこの法を上回る者はいませんでした。

私たちの物語は、ミンダナオの地の海に面して隣り合ったふたつの王国に関するものです。ひとつは、ダトゥー・サビワンに属し、もうひとつは、それより若いラハ・ムダに属していました。

どちらの男も彼らの臣民から尊敬されているすばらしい指導者で、恐れを知らぬ、熟達した兵士でした。どちらの王国も、資源に恵まれていたため、お互いがこの富を相手方が盗もうとするのではないかと疑惑を起こす原因にもなっていました。だから、これらの二つの王国は常に相手と戦争が起こっていました。

ダトゥー・サビワンにはラハ・ソライマンという名前のすばらしい息子がいて、彼も父のような勇敢な兵士でしたが、血生臭い戦争が終わり、恐怖が続くような状況ではなく、その地方のすべての人々が平和に、繁栄と調和の中で生活することを切望していました。

ラハ・ムダには、若く美しい娘、王女プトリがいました。同じような立場のラハ・ソライマンのように、王女も戦争が終わることを切望していたのです。彼女は、戦場で勇敢な夫たちを失った妻たちの叫びを聞くことに、うんざりしていました。彼女は父たちを失った子どもたちの嘆きを聞くことにうんざりしていました。戦争は、悲しむ未亡人や助けを得られない孤児たちの地、双方の王国の将来に悲しい遺産を作っていました。

血生臭い戦争が終わるたびに毎回、王女は宮殿の彼女の部屋に内側から鍵をかけ、死んだ兵士たちや喪に服してる遺族たちのために泣いていました。彼女は失意の中で、愚かな殺戮が終わり、地に平和が帰ってくるように、アラーに祈りました。

ラハ・ソライマンは密かに、美しい王女プトリに恋をしていましたが、彼らの家族や王国が敵同士であることで、彼がいかに彼女を愛しているか、いかに戦争が終わり共に平和な生活を分かち合いたいと望んでいるか、伝える方法がありません

でした。

ある日、ラハは王女に、彼がいかに彼女のことを愛しているか伝えるために、密かに手紙を送る決断をしました。彼はアラビア語で手紙を書き、ペットのカラスの一匹の足に結びつけ、カラスに、風のように飛んで、王女プトリの宮殿に行くように告げました。

そのカラスは安全にラハの所に帰ってきましたが、王女からの伝言はありませんでした。往時は何週間も、彼の手紙に対する王女から返事をまっていたいました。しかし、返事は来ません。

ラハ・ソライマンは、たとえどんな危険があろうと、王女プトリと会い、話す決心をしました。そして、ある夜、彼は密かに帆船を盗み、彼の敵たちのいる地へ出帆しました。

王子のハンセンがラハ・ムダの地の岸に着いたので、それはすぐに、スルタンの兵士たちが乗り込んでいる船によって襲撃され、彼らはラハ・ソライマンの船を壊し、溺死させるために、無情な海に放置しました。

宮殿の高い壁の眺めのいい所から、悲しむ王女プトリは、彼女のふたりの召し使いと一緒にその出来事を見て、勇敢な王子が溺死するのを恐れていました。

彼女が驚いて喜んだことには、その強く勇気のあるラハ・ソライマンは、うまく敵の岸まで泳ぐことができました。しかし、疲れた王子は砂浜に自分の体を引き上げると、彼はまた、スルタンの兵士たちに襲撃され、彼を獐猛に叩いて、出血し意識をなくした彼の体を、また海に投げ入れました。

恐れた王女は、王子が大変卑怯な方法で襲われ、公正に戦う機会が与えられなかったと思いました。王女と召し使いたちは宮殿を出て、海岸まで急いで、手遅れになる前に、助けを得られない王子を救おうとしました。

王女と彼女の召し使いは、海岸について、顔を下にしたまま浮いている王子を見つけました。彼らは浜で薬を飲ませました。王女プトリは、王子が大変弱って、心拍もたよりなかったのですが、死んでいないことを感謝しました。彼女は王子を死なせない、と決意しました。

彼女は、敵を助けることで、父の法律を破ることになることを知っていましたが、王女は召し使いたちを伴って、意識のないラハ・ソライマンを、

フィリピンの神話と伝説

近くにある老女神霊治療家のムヌン・マルルの小屋に運びました。

その老女は、特別な魔術と癒しの力を持っていると信じられていました。もし、だれかが傷ついた王子を助けることができるとしたら、彼女だったのです。彼女の小屋も宮殿警備員たちや兵士たちによって悩まされることなく、安全でした。彼女の霊的賜物を尊敬していたからです。

王女と召し使いたちは老女の小屋の戸まで着き、王女は、その出来事を誰にもささやかないと誓わせて、側近を解散させました。召し使いたちが出てゆくと、王女プトリはムヌン・マルルの戸を叩きました。老女はそこに立っている王女を見て驚きました。そしてそれ以上に驚いたことには、彼女の足元に出血して意識のないラハ・ソライマンを見たことです。

王女は老女に嘆願しました。「どうぞこの可愛そうな男性を助けてください。ムヌン・マルル。彼は死にそうで、あなたの魔術を必要にしています。」

狡猾な老女は、ラハ・ソライマンだとわかり、王女を見ました。「この男は、あなたの父の最悪の敵の息子ではないですか。彼を助けたなら、あなたも私もこの地の最高の法律を破ることになり、私たちは、あなたの父であるスルタンに処刑されるに決まっています。」

しかし、王女は決心していました。「あなたはあえてあなたの王女の命令に服従しないのですか。私はあなたに、彼を癒すように命じます！」

その老女は謙虚に頭を下げ、王女が意識のない王子を小屋に抱えて入れるのを手伝い、ひそかに、だれも彼らを見ていないことを確認しました。

小さな小屋の中では、老女は王子の植えに魔法の呪文を行って知らない言葉を唱えました。

王女と老女と王子にとって長い夜になりました。しかしついに、暖かな朝の太陽の光が広がる兆しが見えてきて、ラハ・ソライマンはゆっくり目を開けました。彼は美しく微笑む、王女プトリの顔が彼に寄りかかっているのを見て驚きました。「あなたが生きていて、私はとてもうれしいわ。」と叫びました。

しかし、王子が王女と老女に感謝を述べる前に、遠いところから、戦いの叫びと太鼓、戦いの準備をする兵士たちの、戦争の音が聞こえてきました。

ラハ・ソライマンは病床から起き上がり、彼の手の中の王女の手を暖かく握りました。「ごめんなさい。私はあなたを残して、戦いに行く父の側につかなければなりません。私がおこにきたのは、あなたに、私がおわたしたちのふたつの地の間の戦いを止めさせたくて、そしてあなたへの永遠の愛を表わしたかったからです。いつの日にか私たちが結婚し、わたしたちのふたつの地を統一して、私たちの王国のすべての人が平和で幸せに暮らすことが、私の願いです。」

王子の誠実な言葉によって、王女の心は、動かされました。彼が出てゆく準備をしている間に、王女は彼にハンカチを渡しました。それは高価な真珠で飾られていました。「このハンカチをいつもあなたの胸の近くに持っていてください。これはあなたへの私の愛の象徴であり、たとえどんなに時間がかかっても、私がおあなたの帰還を待っているしるしです。アラーがおあなたとともにおられますように。」

王は暖かく、王女の額に口付けし、小屋を出て、戦場の父に加わりました。彼が出る時、彼は王女に、彼がペットのカラスの足に手紙を結んで彼女に送ることを告げました。王女は彼女の返事の手紙を白いハトを使って行くと、約束しました。

血生臭い戦争が、二つの王国の間で、何ヶ月も続いて激しくなり、もっと大勢の未亡人と故事が両国にできました。

この間ずっと、ラハ・ソライマンと王女プトリはたくさんの秘密の手紙を交換し、カラスとハトは王女の中庭と王子の戦場本部で飛ぶのが見られました。

ある日、カラスは王女プトリに大変悲しいニュースを運びました。彼の手紙には、王子が彼女に、彼と父ダトゥー・サビワンは戦争に負けていること。彼らは兵士を大勢失って、ラハ・ムダの優れた兵力に対して敗北が迫っていることが書かれていました。

しかし、王女の父。ラハ・ムダは野蛮な男ではありませんでした。彼は賢く、公正な男で、面目を保ち、彼らの王国を救う道を提案しました。次の日、ラハ・ムダは、ダトゥー・サビワンに謎を与えて解かそうとしました。もし、謎を正しく解けたら、彼と彼の家族は赦され、彼の王国を保つことが許可されるのです。しかしながら、もし謎を正しく解くことに失敗したなら、王国は奪われるのです。その謎とは、ダトゥー・サビワンに封印

フィリピンの神話と伝説

された袋がわたされ、その中には何本かの針と何個かの石が入っているのです。彼が正確に、何個の石と何本の針が袋の中に入っているか、答えなければなりません。そうしたら王国の存続が許されるのです。

王女は大変悲しくなりました。そして彼女の愛する王子とその父の運命を恐れしました。彼女は、ダトゥー・サビワンとラハ・ソライマンが負けて彼らの地を諦めるよりも、名誉ある詩を選ぶことを知っていました。王女は、彼らを助けるために、何かをすることを決断しました。

王女は、あの老女ムヌン・マルルに会いに行くことにしました。彼女がダトゥー・サビワンへの謎をよういする仕事を与えられていたのです。「親愛なるムヌン・マルル」王女は嘆願しました。「私はあなたが明日の謎を準備する仕事をしたことを知っています。あなたは私がラハ・ソライマンを心から愛し、彼や家族が死ぬことを許さないことも知っているでしょう。あなたは私に謎の答えを言わなければなりません。」

老女は脅迫されました。「あなたはもう前の行動で、すでに私たちの命を危険にさらしました。そして今、謎の答えを明らかにさせて、あなたは確かな死を招こうとしています。私はそれをいたしません。」

しかし王女は、毅然として言いました。「私はあなたに害を加えることを許しません。ムヌン・マルル。もしこの出来事でああなたが何か責めを負わせるなら、私は自分の行動を完全に責任を負います。」

老女は少し考えて、ためらいながらうなずいて、王女に謎の答えを与えました。

喜んだ王女は宮殿までずっと走って帰り、謎の答えを紙に書いて、ハトの足に結びつけ、ハトを夜の空へ放しました。ハトは力の限り羽をはばたかせ、ラハ・ソライマンの戦争本部に向かって飛んで行きました。

次の日の夜明け、鐘とドラが鳴って、ダトゥー・サビワンと彼の王国の運命が決まる時が近づきました。

ダトゥー・サビワンと彼の息子ラハ・ソライマンはラハ・ムダの宮殿に呼ばれ、スルタンの前に立ちました。赤い布でできた袋がエメラルドヤルビーで飾られ、金の紐で強く結ばれて、金の盆に載せられて二人の前にありました。

「諸君」厳粛にスルタンが言いました。「お前の王国を救う機会は、今お前の手の中にある。お前の前にある袋の中に何個の石と何本の針が入っているか、私に言いなさい。」

ダトゥー・サビワンと彼の息子は、宝石で飾られた袋を長く熱心に見ました。ラハ・ソライマンの心臓は強く打っていました。「もし、王女が私に与えてくれた答えが間違っていたら？」と彼は考えました。「あるいは、たくらみで、その答えは王女からのものでなかったら。」ついに、王子は深い呼吸をして、言いました。「その袋には、38の石と、250の針が入っている。」

スルタンは、あっけにとられ、驚きました。ラハ・ソライマンは謎の正しい答えをしたのです。王子には袋の中の正確な石と針の数を知ることは不可能です。誰かスルタンに近い者が彼を裏切ったのです。そして、彼らは裏切りのために究極の値を払ったのです。

ダトゥー・サビワンとラハ・ソライマンは拘束され宮殿の地下牢に、スルタンが彼らの運命を決めるまで投げ入れられました。

裏切りの容疑はあの老女ムヌン・マルルにかけられました。スルタンを除いて、彼女だけが謎の答えを知っていたからです。尋問されて、老女は、スルタンの信頼を裏切って謎の答えを打ち明けたことを認めましたが、彼女は、スルタンの娘が裏切りに関与しているとは、言いませんでした。

すぐに裁判が求められ、スルタンは老女を宮殿の中庭の木の杭に結びつけ、そこで、王国に対する反逆の罪で生きのまま焼き殺すように命じられました。ダトゥー・サビワンとラハ・ソライマンは地下牢から処刑を見せるために連れてこられました。

しかしスルタンの兵士たちが老女の周りに積まれた蒔きにトーチで火を着けようとした時、王女プトリが彼女の救いのためにやってきて、スルタンに、自分がムヌン・マルルに王の信頼を裏切るように強いた者であることを告げました。ラハ・ムダは、自分の娘がそのような罪を犯したことに落胆しました。

「どうぞ、あなたを裏切った私を赦して下さい、おとうさん。」と王女は叫びました。しかし、私はラハ・ソライマンを心から愛しており、彼や彼の家族そして王国をあなたが壊すのを安閑と見ていられないのです。」

フィリピンの神話と伝説

スルタンの心は娘のことで悲しみに重くなっていました。「私はおまえの良心からの動機を理解できる。」と彼は言いました。「しかし、おまえはこの地の最高の法律を破った。そしてたとえ王女であっても法律の上にいるのではない。そのことは悲しみにたえないが、お前の法律に反逆したことの結果を受け入れなければならない。老女の所にある杭で焼かなければならない。」スルタンは娘に口付けして、目に涙をうかべて言った。「私を赦してくれ。」

王女は父に暖かく微笑み、兵士たちは彼女を取り押さえて、木の食いに結び付けました。「私はあなたを赦します。お父さん。」と彼女はつぶやきました。

しかし兵士たちは、王女を焼き殺す準備を始めますと、ラハ・ソライマンはスルタンの兵士たちから逃げて、王女の父のところへ入ってゆきました。彼はスルタンの前にひざまずきました。「ラハ・ムダ・・。私は王女の助命を願います。」と彼は申し立てました。「長年、私たちの王国はお互い戦ってきました。そして、無駄に大勢の命を失い、たくさんの血を流しました。長年、あなたの娘と私はこの破壊的な、苦い対立が終わるように祈ってきました。どうぞ、あなたの娘との結婚を許してください。私は約束します。私たちは共に働き、共に平和と繁栄の旗の下で、私たちの民の利益と将来のために、私たちの王国を立て直します。」

スルタンは王子の平和の嘆願に心を打たれました。彼は王子の肩をたたき、起き上がるように命じました。「私はあなたの嘆願が、心からのものであり、アラーの神のご意志によって祝福されると信じる。私は、娘と結婚するあなたに祝福を与える。」

中庭の全ての人は喝采を贈り、兵士たちは王女を自由にして、彼女は王子の腕に走り寄りました。彼らは喜びの涙を流しました。スルタンは兵士に、ダトゥー・サビワンを解いて、二人は友情の握手をしました。

ムヌン・マルルは、前に出て、石と針の入った赤い袋を持っていました。彼女はダトゥー・サビワンとラハ・ムダの方に振り返り、赤い袋を彼女の頭の上に高く持ちました。すると彼女は呪文を唱えました。「私は霊たちにこの栄光の日をたたえるようにお願いします。王女プトリとラハ・ソライマンの間の愛の力が、二つの国の間に長く、憎しみ、疑念、流血があったものを、終わらせた。私は神秘的な霊たちにこの特別な日を永遠に記

憶するため、そして私たちの土地が永遠に統一されて続くような印を私たちに与えてくださるようお願いいたします。」

その老女は赤い袋を地面に投げて、知られていない言語で、奇妙で不可解なことばを唱えました。すぐにその赤い袋は、内側の光が輝いて光り始め、見ている人々は目を閉じ、不思議なため息を口にしました。するとその袋は爆発して炎になり、膨らんで白く、中庭全体に煙が輝きました。煙が消えてしまうと、赤い袋は中庭の地の上に、黒い土地になりました。しかし、びっくりした群衆の目の前で、黒い土地は中央から分かれて、枝分かれした触手のように、地面から上方へねじれて、たちまちのうちに、形を変えて、一本の小さな木になりました。観衆が目撃したものに何が起こったか理解する前に、おかしな緑の実は、この魔法の木の枝に現れ始めましたが、それは風船のように膨らみました。

中庭にいた人々が不思議に思ってじっと立っていると、微笑んだムヌン・マルルは木まで歩いてきて、その中の大きな緑の実を取りました。彼女がそれを持ち上げたので、群衆はそれを見ました。それは外側の皮に、何百もの鋭い針で覆われていて、ちょうど赤い袋の内側に針がたくさん入っているようです。老女は兵士たちの一人から剣を取り出して、そのおかしな実を半分に切りました。また群衆が驚いたことには、この独特な実の種は、赤い袋の内側にあった石と同じ色で同じ形をしていました。

次の数日両方の王国の人々はお祭りをして祝いました。彼らは何十年もの戦争が終わって平和が始まったことだけでなく、王女プトリとラハ・ソライマンの喜ばしい結婚も祝いました。

そして、もちろん、ふたつの地のすべての宴会と夕食の食卓には、外側に「針」があり、内側に「石」のある魔法の緑の実が、その場所の誉れとして、すべての人の喜びの象徴になって思い出されるものとなりました。今日では、私たちはこの魔法の緑の実を「ジャックフルーツ」と呼んでいます。